婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(9)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林　恵子

十七

横浜　一八七三年五月十六日

私の愛している若いお友だちへ

海の向こうの日本の子どもたちのために沢山の贈物を送ってくれたアメリカの子どもたち―故郷の親切で器用な指をした皆さんたち―きっと私たちのバザーの「子どもたちのテーブル」について、知らせて欲しいと思っていることでしょうね。あなたたちの贈物はみな無事につきました。ありがとう。あなたたちが小さな手で作ってくれた沢山の可愛くて役に立つ贈物の数々を見て私たちはお薬を飲んだように元気づけられましたよ。皆さんもこれを聞いてきっと喜んでくれることでしょう。私はいろいろと苦労して、これらの品々をここのホームの小さな女の子たちに見せました。そしてこれらの贈物は遠く離れたアメリカの子どもたちが自分のお小遣いを貯金し、時間をかけて作ってくれた品物だという事を理解させました。アメリカの子どもたちがあなたたちを愛し、みんなが楽しくホームで生活できるよう

に、イエス様とその愛について学ぶことができるように、お手伝いしたいと思っているからだと話しました。

私たちは小さな子どもたちの手で作ったと思われる品物をみんな集め、バザーの長いテーブルの真中に並べました。愛くるしい沢山の人形たち、着ている洋服や小さな寝台など、何て可愛いのでしょう！どれもこれもみな、子どもたちが大好きなものばかりです。それから私たちはここの女の子たちにこの可愛い品物を売らせましたがその事が子どもたちをとても喜ばせました。その喜びようはあなたたちが想像できないほどだったのですよ。私たちのホームには大勢の子どもがいますので、品物を売るのは順番にさせるようにきめ、大きな子どもたちのそばの椅子に一番小さい子どもたちを立たせました。

ミス・ガスリー（註1）は子どもたちみんなにいろいろ指図したり、お客さまに私たちの子どもがきれいに見えるように一番よい服を着せるなど忙しく立ち働きました。アメリカでもお母さんたちはそうするでしょう。

子どもたちが売る順番は次のようなものでした。

＊ミニー（Minnie）　ソノ（Sono）　ファニー（Fannie）　アニー（Annie）

＊サケ（Sake）　ベッシー（Bessie）　メアリー（Mary）　ハンナ（Hanna）　ニナ（Nina）

＊ジェニー（Jennie）　イロ（Ilo）　カイ（Kai）　ハル（Haru）

それに幼いマーベル（Mabel）マミー（Mamie）、それからキク（Kiku）マギー（Maggie）ヤス（Yasu）シエ（Sie）の順番でした。バザーの三日間は毎日午後からでしたが、私たちの子どもたちはあなたたちが想像する以上に幸せなひとときを過ごしました。

私はバザーの品物を買いに来た女の人たちに私たちのホームと学生についてもっとよく理解して貰えたと信じています。もし、私たちがこの様なバザーをまた開く事ができたら、この人たちは前よりもっと私たちを喜んで助けてくれるに違いありません。

この人たちは、ホームの子どもたちがここで暮らすことがどこにいるよりも幸せなことが判ったのですから。おわかりのように皆さんたちはお金や品物を送って下さることで、私たちが部屋数のある広い建物を買えた事やホームに入りたがっている子どもたちを受け入れることができただけでなく、ホームの小さい子どもたちに今まで経験したことのない素晴らしい三日間を与えて下さったのですよ。

神様があなたたち一人一人を祝福して下さいますように、そして私たちの家族全部が神の子となれるように熱心に祈ることができるように助けて下さいますように。

あなたたちの愛するお友だち　ミセス・ブライン

＊

十九

横浜　一八七四年一月四日

愛する子ども達へ

私たちの楽しかったクリスマスの思い出がまだ鮮明に残っているうちに私は一年前のバザーに可愛い贈物を沢山送ってくださった親切な友だち、とりわけ小さな子どもたちにお話をしたいと思います。一年前といえば子どもたちにとってはとても長いことでしょうし、自分たちが作った贈物についてあれから何も聞かないと思っているでしょうね。でも皆さんたちの贈物がクリスマス・イブに私たちの学校の可愛い子どもたちや少女たちに与えてくれた幸せについて私はあなたたちにお話しすることが一杯あるのですよ。

私たちが今年のクリスマスツリーについて相談し始めた時、どうしたらよいか本当に困ってしまったのです。アメリカからインドの子どもたちには品物が送られたようですが私たちには品物を送る約束をしてくれる人が誰もいなかったのです。去年、私たちを援助してくれた船員さんたちの多くは帰ってしまったし、それに幾つかの理由があってここの土地の人々には頼めないのです。そこで私たちはどう

やってクリスマスの品物を手にいれたらよいか困ってしまったのです。学校も人数が増えてきたので私たち婦人宣教師がその費用を負担するのも難しいことでした。そのときふと私の心に浮かんだのがバザーの後に残った品物の入った幾つかの箱のことでした。あれはいつかもっと品物が増えたときに又バザーをしたらと思って大切にしまっておいたのですよ。私たちはそれについて話しあってこの品物を送ってくれた子どもたちもこうした目的のためにふさわしい品物があれば使って貰う方が嬉しいのじゃないかしらという結論に達したのです。そこで品物を調べてみると驚いたことにまるでクリスマスのために作ったみたいにぴったりした物が沢山あって大喜びしました。おかげで私たちの子どもたちはアメリカの子どもたちと同じように素敵なクリスマスツリーと楽しいクリスマスを持つことができたのですよ。

子どもはみんな利口で好奇心が強いものなのですね。私たちが準備している或る部屋のドアが開くたびに沢山の可愛い頭がのぞきこむのよ。そして包み紙や包んだ物が見えるとああだのこうだのと話しあっているのですよ。こういう事になると日本の小さい女の子たちもアメリカの子ども同じです。日本の子どもたちはでしゃばったり自分勝手な事をしたりはしないけれどやっぱり好奇心は強いのよ。ミス・クロスビーは教室の飾り付けを受けもって、大勢の女の子に緑の葉っぱで花輪を作りそれを厚紙に縫いつけるように頼みました。それはあなたたちも知っているように大変な仕事で皆はとても忙しくなりましたが、本当によくやってくれました。多くの人たちがこんなに可愛らしい部屋を見たことがないと言ってくれました。

あっ、一寸先を急ぎすぎました。すこし話を戻して女の子たちや小さい子どもたちが楽しい事をしたのをお話ししましょうね。それはポップコーンを糸でクリスマスツリーにつりさげたことです。日本の子どもたちはこんなもの見たことがなかったので面白がって大喜びしたのよ。そのポップコーンが私に

とって最高に良かったのはそれが私たちの畑で育ったものだったからなの。カプロン将軍がその種を幾らか下さったとき、私はこれが育ったらどんなにか楽しいだろうと思って畑に蒔いておいたんです。そしたら思ったとおりそれが今こうして私たちを楽しませることになったのよ。それから私たちは蚊帳を使って大きな袋を作り、その中にポップコーンや日本の飴を入れて子どもの数だけクリスマスツリーにつりさげました。

こうしてやっとクリスマスツリーの準備がすっかり出来上がりました。もし、アメリカのお友だちが子どもたち一人一人に配られた贈物や用意したケーキや果物などを貰った沢山の子どもたちの嬉しそうな顔々を見ることができたらどんなにいいでしょう。きっとみんなはバザーの残り物がそんなに沢山あってよかったと喜ぶだけでなく〝来年はクリスマスに贈物をして皆を助けよう〟と言ってくれるのではないかしら。それこそ私たちが皆さんにして欲しいことなのです。なぜかというと誰かが私たちを助けて下さらないとこのような楽しみを持つことが出来ないのですから。私たちを助けてくれた或る少女のお話をしましょう。この少女はアルバニーに住んでいてよく私に手紙や贈物を送ってくれるのです。そしてとうとうある時、お父さんの庭で市を開いてくれました。そして彼女の小さな弟や妹も手伝ってくれて楽しい時をもっただけでなく十六ドルのお金を集め〝子どもたちのために使って下さい〟と私に送ってくれたのですよ。

あなた達が愛しているお友だち　ミセス・プライン

＊

二十

横浜　一八七四年二月十八日

愛する孫たちへ

今日もまた、おばあちゃんはアメリカの可愛い孫たちにお話をしたいと思います。何て私はあなたたちとお話しするのが好きなんでしょうね。この小さ

な机の前に腰かけて紙にむかっておしゃべりしたことが太平洋を渡っていって貴方たちにこの手紙を読んで貰えるなんて本当に素晴らしいことだと思います。でもただ一つ残念なのは、この〝おしゃべり〟が一方通行になるんじゃないかという事です。私はあなたたちの声を聞くことができないから、皆がどんなことを考えているのか、どんなふうに時間を過ごしているのか聞くことができないのですよ。でも、時々はあなたたちからおばあちゃんへの手紙を貰って、それを読むと私は手紙をだした甲斐があったと幸せな気持ちになるのですよ。

さて、私のお話をしましょうね。それは私たちの小さな女の子の一人のお話です。あなたたちにそれが誰か言い当てて貰いましょうかね。この子のことはこれまで何度も書きましたから誰のことか当てるのはそんなに難しくないと思いますよ。

この子のお父さんはスコットランドの出身で大酒飲みです。医者は彼にお酒をやめないと間もなく死んでしまうだろうと言うのです。私はその人に死んだ後、彼の小さな女の子が困らないように遺言書を書いておいてくれるように頼みました。でも彼は自分がそんなに危ないなどと思っていなくてこの子のために何もしてくれようとしないのです。

彼は今のところはお金持ちですが、もし遺言書を残さずに死んでしまったら、この子の母親は日本人ですからこの小さな女の子は何も貰えないことになってしまいます。そして貧しい子どもとして人々の情けに頼って生きていくより仕方がなくなるでしょう。

先月、彼は病気がひどくなって自分の幼い娘に会いに来てほしいと頼んで来ました。私はたとえ一晩でもそんなひどい状態の父親と一緒にこの小さな子が過ごすのはどうかと思ったのですが断れませんでした。

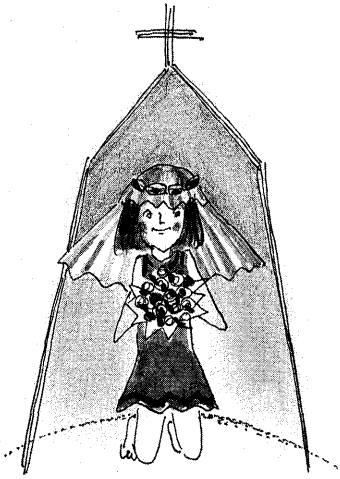
この子がホームに帰って二週間ほどになりますが父親からは何の音沙汰もありませんでした。そこで私は父親のかかっている医者に会って彼の具合はどうなのかと尋ね、小さな娘が一文なしで残されない

ように彼に遺言書を書くようにしむけて貰えないかと頼みました。

その医者はできるだけのことをやってみましょうと約束してくれましたが「でも、彼は今すぐ死ぬようなことはありませんよ。彼はお酒を飲むのを止めたのですから。彼はずいぶん変わったようですよ」と言いました。

私はこれを聞いてたいへん喜びましたがこの手紙を書いている一日か二日前までどうしてそうなったか知りませんでした。この女の子がまた父親に会いにいくことになって準備をして待っている間にこの子は歌を歌い始めました。「There is a happy land」（あまつみくには　いとたのし　讃美歌四九〇番）私が「お父さんのところへ行ったらこの歌を歌ってあげてね。そして天国に行きたくないかって尋ねてあげてね」と言いました。「ええ、お父さんにイエス様を愛さないと天国へは行けないわよって言うの」とこの子は言いました。それから一寸間をおいて「この間、お父さんの家へ行ったとき私、イエス様にお祈りしなきゃだめよって言ったの。そしたらお父さんがそうするって言ったのよ」

「お父さんのために歌ってあげたの？」と私は聞きました。「ええ、そうよ。歌を歌って、お祈りしてあげたの。それからお父さんにもお祈りをして



貰ったのよ」

お医者さまが彼が変わったと話したことの秘密はこれだったのですよ。この可愛い子どもの影響で罪深い父親がより清らかで良い生活にひきあげられたのも神の力でなくてなんでしょう。それが証明されることを望みます。そして私たちも共に喜び神を讃美したいと思います。

今、私はちょっと子どもたちから頼まれてしまいました。それなんだと思いますか？　私がこうして手紙を書いているとドアをやさしくノックする音が聞こえました。私が「どうぞ」と言うとドアが開いて五人の小さな顔がのぞきこみました。みんな、とても嬉しそうな顔をしています。一人の子どもが言いました。「ミセス・プライン、私たち、お昼からお茶会ごっこをしてもいい？」もう、あなたたちにもわかるわね。お茶会というのは、お母さんが子どもたちのために用意してくれる小さなお皿、ケーキ、木の実などすべて良い物のことよ。本当は今日の午後は静かに手紙を書きたかったのですけれど、この可愛い子どもたちの顔には負けてしまいますね。そこで、芝生の一方の側の低い木々の間に日本式のテーブルと竹製の腰かけを用意し、小さなお盆の上にクラッカーや葡萄、栗などを並べました。そして、今、十六人の幸せな子どもたちがこの素敵な場所でお茶会ごっこをしているのですよ。こういうことで時間がなくなってしまったので私の手紙はこれでおしまいにしなければなりません。

みんなに愛をこめて　おばあちゃん

最初の二つの手紙は故郷ニューヨーク州アルバニーの教会の日曜学校の子どもたちにあてて書かれたもの。故国の子どもたちの手作りの贈物―愛くるしい人形や洋服など、沢山入った箱々を手にしてどんなにか元気づけられ、二度にわたって役にたったという手紙。これらの贈物でバザーを開いてホームの子どもたちが大喜びした姿が目に見えるようである。売る順番をきめた子どもの名

前をみると、ソノ、ハルなど日本名の子とメアリー、ジェニーなど外国名をつけている子がいて、他にサケ、イロなど名前の読み方がはっきりしない子どもがいる。ここでは十九人の名前があげられている。当時は日本からの経済的援助は頼めなかったようで、クリスマスを祝うにしてもそのやりくりは大変だったことが理解される。こうしたなかで、子どもたちに楽しい経験を与える事をこんなに大切に考え、創意工夫をこらしたプラインたちは何と賢く心のあたたかな人々だったろう。

最後の手紙は大酒飲みで病気のスコットランドの父親が幼い娘の信仰によって変わっていく実話を書いたもの。プラインはこうした幼い子どもによって教えられ勇気づけられており、ホームの子どもを我が子のように愛して育てていた事がこれらの手紙から読みとれる。

（国立音楽大学）

＊〈註1〉ガスリー（Miss Elizabeth M. Guthrie）

一八三八年、ペンシルヴェニア州生まれ。プラインたちと同じ米国婦人一致外国伝道協会から派遣された婦人宣教師。インドで宣教に従事していたが健康を害し一八七二（明治五）年、帰米の途中このホームに滞在し混血児の世話にあたった。彼女はお話が上手でよい声で歌を教えたという。（「横浜共立学園の120年」写真参照）

一八七八（明治十一）年帰国。再び日本へ婦人宣教師として来日の途上、一八八〇年五月十五日、サンフランシスコで病没した。このとき、インドで共に働いた親友ミス・ブリテンが彼女の志を継いで来日。一八八〇（明治十三）年十月二十八日、横浜にブリテン女学校（現・成美学園）および幼稚園を創立した。興味ぶかいことに、その建物はプラインたちが最初に使用した横浜四十八番館であった。私立幼稚園としては同年四月に創立された桜井女学校付属幼稚園に次ぐ先駆的なもので、フェリス女学校卒業生で東京女子師範学校保姆科を卒業した原田良子が保育者としてその任にあたった。